灰色と水色の空

銀舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色と水色の空

【Ｎコード】
Ｎ６８８８Ａ

【作者名】
銀舞

【あらすじ】
妖怪雪姫・神主未外・ヤクザ組長冷無が繰り広げる非常識ストーリー。

第二歩　俺は先輩・・・？（前書き）

主役は彼（未外）ではありません。
ややこしいです。

第二歩　俺は先輩・・・？

入学式当日

何故かルンルン気分の男、空裏（くうら）　未外（みんがい）は、軽い足取りで、晴れた青空の下を歩いていた。

「俺もやっと『先輩』なんて呼ばれるんだ～！新一年生・・・・どんな子が居るのかな～・・・」

なんて調子で、通学路のアスファルトを踏んで行く。

予報では、降水確率０％。

とても良い日和である。

そんなこんなで－－－－－－－－学校到着。

校門には１ｍ４０ｃｍほどの縦看板が立て掛けられてていた。そこには、

「飛鳥文高校・第８１回・入学式」

と、書かれていた。

異様にテンションが高い未外は、昇降口へと、吸い込まれるようにして、その姿を消していった。

ザワザワと落ち着かない体育館。２・３年生の１年生に対する・・・

まぁ、歓迎会が終わり、言うなればクライマックスだ。

３年生が、１年生に向けて校歌を歌い始めた時、トラブルが発生した。

冷無が体育館にやって来たのだ。

それも、４０人ほどのヤクザ達を引き連れて。

「おぅおぅおぅ！！太刀気の旦那が御通りだぜェ・・・道空けんかいィィィィ！！！！」

もの凄い大きな怒声が、館内に響き渡る。

「止せよ。１年っ子がビビッてるじゃねぇか。」

やけに落ち着いた声だった。こいつがこの辺でも有名なヤクザ組長。

太刀気(たちき)　冷無(れいむ)だ。
「すまねぇな、中断させちまって。ほら、続けろよ。」
冷無の一言で3年生は、冷や汗をかきながら校歌の続きを歌いだし、新入生は、「何だ？あの先輩・・・・。」みたいな事を、ヒソヒソと耳打ちする
と言う、散々な結果に入学式は終わった。
式が終わり、帰り道での事・・・・・・・・・・。
「ちょっと冷無！君、何て事してくれてんの！？新入生めっさ怖がってたじゃないか！！」
「うるせーなぁ、お前が言ったからちゃんと出てやっただろ？式によぉ」
「あぁいった人達を連れてくる必要はないだろっ！もぅ・・・・」
「あっ、てめっこの、仲間を侮辱するんじゃねぇよ！」
神社へ向かうアスファルトの道踏みしめて、これから何が起こるとも知らず・・・・・・・・・・。

続

第二歩　俺は先輩・・・？（後書き）

やっと第二歩まで来ました。
読んで頂き、感謝感謝です。
相変わらず感想、お待ちしております。
良かったらどうぞ。

第三歩　雪の色（前書き）

高校2年生になった未外（みんがい）と冷無（れいむ）
の二人。
神社の中庭で出会った水色髪の人物は・・・！
みたいな感じデス。

第三歩　雪の色

神社へと向かう道。
冷無（れいむ）と未外（みんがい）の２人は、不機嫌な顔つきで、歩いていた。
「ハァ・・・ただいまぁ～。」
未外はダルそうな足取りのまま、玄関の床を踏んだ。
「未外さん、お帰りなさいっ！」
ペコッ　と、頭を下げる門下生に続いて
「お帰りなせぇ！太刀気の兄ぃ！お帰りなせぇ！未外さんっ！！」
ヤクザの面々も頭を下げ始めた。
「うん。ただいまー、皆。」
「おぅ。元気だなぁお前ら。」
つられて、彼らも挨拶を。　何とも礼儀正しい人達だ。
「じゃあ、夕飯つくるからさ、皆手伝ってね」
「はいっ！」
未外がそう言うと、５人ほどの門下生が勢いよく返事を返した。
ちなみに、今夜のメニューは　”未外特製　ドロドロ田舎カレー”
だそうだ。
ネーミングセンスは悪いが、すごく美味しいらしい。

・・・・・・　４０分後　・・・・・・
（雨・・・？いや、雪？かな？それとも・・・・・・混ざってるの？）
窓の外、先程までは洗濯日和だった天気が今や、梅雨の天気とも、
冬の天気とも取れる異様な物に変わっていた。
まるで－－－－－－－天変地異の様に。
「あーぁ。洗濯物濡れちゃうよ・・・。冷無ぅ～？洗濯物、取り込
んで来てぇ～」
居間に居る冷無に、未外は声をかけた。
「チッ・・・ハイハイ・・・・」

疲れた様子で腰をあげた。
その時何か・・・・冷無は胸騒ぎがした。

ダボダボのジーパンを引きずりながら、玄関先で靴を履き、外へ出ると、霧・雨・雪の三つがごちゃ混ぜになった様な景色が、冷無の前に広がっていた。
（ンだよ・・・この天気）
ズボンのポケットの手を突っ込み、物干し竿がある、中庭の方へ足を進めた。
しばらく歩いた所・・・曲がり角にさし掛かった時。
冷無は、水色の髪の様な物が、風に舞うのを見た。
（・・・！誰か居るのか！？）
泥棒の類かと思った冷無は、ダッシュで角を曲がった。
「テメェ！一体なにもン・・・・・？！！」
この光景を・・・どう、説明しようか・・・・・・・・。

第三歩　雪の色（後書き）

第一歩　朝の日いつのひ
は、手違いで別な所に飛んじゃいまして・・・・。
コメディー・　で検索し、しばらく探せばあると思いますので、第一歩が読みたい方は大変お手数ですが、上記の様にしてお探し下さい。
申し訳ありません。

第４歩　晴れた雪（前書き）

中庭に女神のような女性が・・・！
一方洗濯物はーーーーー水が滴っている（泣）。

第４歩　晴れた雪

　　ざああァァァァァァァァァ・・・・・・・・・・・・・

降り止む気配のない雨混じりの、雪。

地面に叩きつけるような音。

人に当たり、弾け落ちて行く音。

中庭に、一人。

美しい女性が・・・・いや、大人びた少女が、天を見上げていた。

冷無（れいむ）は見惚れた。

水色の長髪・白く、透通る様な肌・雫に濡れた――――――――

―淡く赤みがかった唇に。

明らかに日本人ではないような雰囲気をかもし出している。が、何

か、感じる物が、少しだけだが・・・あったのだ。冷無には。

（ハッ！い、いけねぇ！）

我に返った冷無は、心の中で声を上げた。

そしてたたずむ女に声をかけようとした。

だが、口に出すより先に、女の方からこっちを向いた。

気配に感ずいたのだろうか。

その目は・・・・青く光る丸い目は、驚愕に震えていた。

けれどすぐに気を静め、優しく冷無に笑みを作って見せた。

また見惚れた。

一言で表すなら、そう、”女神の微笑み”と言ったところだ。

この世の者とは思えない美しさ。極楽の天使と言っても全く嫌味は

無い。

だがその美貌は、一瞬にして地面に倒れこんだ。

　　ドシャァァッ

物が崩れ落ちる時の派手な音と共に、泥が、跳ねた。

「おいっ！姉ちゃん大丈夫か？！おい、オイッ！！！」

女神は倒れた。

段々と霧が濃くなる中、水色の髪は泥にまみれた。
洗濯物は・・・・・・・・もう、手遅れだ。
雨混じりの雪は止むこと無く、２人の上に降り注いでいった。

第４歩　晴れた雪（後書き）

第一歩　朝の日いつの日
は、別な所にございますので・・・・・。
詳しい事は、前回作品の後書きを御覧ください。

第五歩　男なんて皆同じようなもんだ（前書き）

未外もお年頃ですネ・・・・☆
そんな内容。

第五歩　男なんて皆同じようなもんだ

女はその後、客室に運ばれた。
だが起きる事は無く、３日の時間が流れてしまった。
「まだ起きて来ないね・・・あの人・・・・・。」
未外(みんがい)が心配そうに冷無(れいむ)に言う。
「もう、死んでたりしてな。ハハッ。」
居間で週刊少年ジャンプを読みながら、冷無は苦笑する。
「なっ・・・！え、縁起でもない事言うなよっ！！」
否定はするものの、段々と不安になり、終いには冷や汗をかき始める未外。
ついにはもう、我慢出来なくなり・・・・。
「あぁっ！俺部屋見てくる！！」
よほどの心配症。
ドカドカと居間を出、廊下を進み始めた。
冷無は、
「ハァ～・・・うるせー奴・・・・・・！」
呆れ気味だ。
なおもジャンプを読み続けている。
＊＊＊
「たくぅっ。冷無の奴・・・。礼儀ってのを知らないんだから。」
不機嫌極まりない未外さん。
怒ってる内に彼女の寝る部屋の前にたどり着いた。
「な、何か・・・罪悪感があるんだよなぁ・・・・・。」
まぁ未外も男だ。
女性が寝ている所へ勝手に入るのは少々・・・と言うか、気が進ま

ない。
（冷無に愛想つかしてココまで来ちゃったけど・・・・・・。いざとなると・・・入り難いなぁ・・・。）
躊躇しながらゆっくりと取っ手に手を掛けた。
（よ、よぉ～し。あ、ぁぁ開けるぞ・・・！）
正直気持ち悪い。
変態のような心の掛け声と共に、これまたゆっくり襖を開けた。
スッ・・・・・・
襖が開いた。
目に飛び込んで来た物。
それは・・・・
美女の健やかな寝顔である。
「わ・・・ぁぁ・・・。」
音の出なくなった蓄音機の如く、未外撃沈。
その時、未外は気付かなかった。
彼女の・・・、肩の辺りで一本に結んであり、膝まで伸びた長髪が、今まで結んであった所でちぎれたかの様に短くなっていたことに。

第五歩　男なんて皆同じようなもんだ（後書き）

アホな話でしたね。
なんか・・・・すんません。

第六歩　表裏（前書き）

目を覚ました彼女が起こした騒動とは？

第六歩　表裏

人間が住む国、地球。
いや、人間界。
その人間界と丁度重なるかの様に存在する空間、人間以外の生き物が住まう空間、魔界。
魔界には妖怪がウジャウジャと生存し、支配していました。
ある日その国に、それは美しい、珠のようなお姫様が生まれました。
その、姫の名は――――――――――――。
＊＊
「ん・・・ぅ・・・・・・」
未外（みんがい）の気配に感づいたのか、光の如き寝顔は、薄っすらと瞼を開いた。
宝石みたいな青い瞳。
虚ろ気に天井だけを、見つめた。
　ガタッッ！
大きな物音が、無音だった部屋を一気ににぎやかにする。
「痛ぅ〜・・・何でこんなとこに椅子が・・・」
未外だ。
呆けた未外がふらついた拍子に足を躓かせたのだ。
その物音にビクッ　と体を跳ね上げた彼女は、未外の事を少しの間だけ、見つめた。
裏声で悲鳴が上がった。
「あっ・・・！お、お早うございま――――ひぃっっ！！！！！」
これもまた、未外のモノだ。
数秒前まではクッキリとしていた青い目が、鋭く殺気を放つ。
未外の首元には彼女の構える、ナイフの様に変形した刀が突きつけ

られた。
「あ、あの・・・・す、すすすすみません。でも、ほ、ほら出会いがしらに人殺しはマズイと思うんですよぉ。
お互い未来が広大に広がっているのに、その・・・こ、ここで駄目にしちゃうのも難だと・・・・。
そ、それにホラ！お、俺・・・あの、て、寺の住職だから殺したりしたらバチが当たるかも・・・・・・ひぎゃぁっ！！」
恐怖のあまり、理解不能な言動を繰り返す。
その間、さらに強く刀を喉に押し当てられ、再度悲鳴を上げた。
そこに・・・
「んだ、うっせーなー・・・・。ジャンプ貸さねーぞ？」
悲鳴に気付いた冷無（れいむ）が、居間から客室まで来たのだ。
「れ、冷無っ！！！」
嬉さと恐怖心が混ざった叫び声だった。

第六歩　表裏（後書き）

作中にジャンプが出てくる訳・・・・・プロフィールを御覧下さい。

第七歩　裏（前書き）

髪が短くなった彼女。
２人はまだ気付きません。
いつ、気付くの？（知るか）

第七歩　裏

姫はすくすくと育ち、あっという間に美しい女性になりました。
国に住む妖怪とゆう妖怪が見惚れるほどの美貌を持つ彼女は後に—
————————殺されてしまいました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊
ドサッ・・・
冷無（れいむ）は持っていたジャンプを畳に落とした。
いや、正確には、驚きのあまり手の力が抜けた　　と、言おうか。
「冷無・・・！」
未外（みんがい）が助けてサインを出した。
　ヤバイよこの人、気が動転してる！
アイコンタクトで冷無に言う。
　あぁ？！ジャンプ貸せって、今言うかよ！？
伝わってねぇよお前ら。
そんなこんなだが、冷無は切り出した。
「お、おい。ネェちゃんよォ・・・てめぇの事助けてくれたヤツに対してそりゃねーんじゃねーの？」
「・・・・・・・」
しばらく沈黙が続いた。
そして、殺気を放っていた美貌がナイフの様な刀を下ろし、口を開いた。
未外がその横で安堵の溜息を漏らしている時に。
「————助けた・・・？私のこと・・・を・・・・・？」
一言で言える。
美声だ————————と。
冷無は、自分の心臓が尋常じゃない早さで動くのが分かった。

未外も同様にだ。

「あぁ。そ、そそそ、そうだよ。」

冷無の声は震えていた。

「そう・・・なの・・・・。ごめんなさい。私、てっきり――――」

「？」

彼女は、下に目をやり、うつむいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

殺された姫には、兄・母・父の３人の肉親がいましたが・・・・

皆、離ればなれになってしまいました。

それから４０年後――――姫の生肝が隠されました。

第七歩　裏（後書き）

テンション低いです。
周りがうるさいからか・・・？
でも、小説内ではテンショ高いっスね。

第八歩　表（前書き）

彼女の名前。
そして過去・・・・。
だいたい明かされる！

第八歩　表

人魚と雪女。
この2種類の妖怪の生き肝・・・・すなわち心臓は人間にとっても妖怪にとっても、不老不死の効果がある。
妖怪と言えど、皆が皆、不老不死とゆう訳ではない。
妖怪の住む魔界でも、その能力は珍しい。
その、不老不死の効力を生まれた瞬間に授かったのが、魔界の姫である。
魔界国の妖怪は皆、うらやましがった。
不老不死の能力を、眩いばかりの美貌を・・・。
そして大人になると姫は、姫を嫉んだ妖怪達に襲われ――――――
バラバラにされました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なぁ、ねぇちゃん。過去を語る前に教えてくんねーか？」
「・・・・？」
冷無（れいむ）が、目を伏せていた彼女に言った。
彼女は・・・顔を上げた。
「まず一つは、アンタの名前。
　んで、もう一つは・・・・・・。」
そこで言葉を切った。
聞いてもいいのか　　と少々戸惑ったのだ。
だが、何かに突き動かされ・・・
「もう一つは、アレだ、何でここの中庭に居たかって事だ。」
きっぱりと言ったつもりで冷無は彼女の瞳の奥を見つめた。
ちょっと、照れくさかった。
「そうよね・・・名乗らないのは失礼よね・・・・」

また下を向いて、彼女は言った。
いつの間にか短くなっていた水色髪を手で押さえて。
そしてすぐ、前を向いて、未外(みんがい)と冷無に伝わるように、話始めた。
「私は――――雪姫(ゆきひめ)。
人魚と雪女が混ざってる妖怪。ここじゃ珍しいかもしれないケド・・・」
クスッ　と笑むと世界中が光に包まれた様な感覚に取られた。
でも・・・あれ？ちょっと待て・・・・・ん？妖怪って・・・・・
何？！
2人が思い直すと、同時に叫んだ。
『妖怪ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ？！！！！』
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
魔界の姫の名は、雪姫(ゆきひめ)。
姫の生き肝は、「冬海の祭壇」に隠されていました。
その後、殺された姫の肉片は――――――再生し、息を吹返しました。

第八歩　表（後書き）

未外台詞ねぇ～。
あ、ちなみに言うと、主役は皆。
んで、メインが●●さん。（誰？）

第九歩　本性（前書き）

雪姫のホントの姿。
彼女は何者なんでしょう？

第九歩　本性

バラバラにされ、しばらくしてまた生き返った雪姫様は、小さい頃に母親が唯一残してくれた「異空間の間」に、隠れました。
その「異空間の間」は、５つの空間にさらに解かれていました。
・・・・・・・・「春花の塔」・「夏楽の滝」・「秋風の谷」・「冬海の祭壇」・「無音の丘」・・・・・・・・・
５つの空間が存在していました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「え・・・？え、えぇ、妖怪。ごめんなさい・・・・！あの・・・・ビックリさせちゃって・・・・・」
雪姫（ゆきひめ）は、暴露したとたん、深く頭を下げた。
それがなんとも愛い愛いしぃ。
「ゆ、雪姫さん。そんな・・・こちらこそ、大声上げて・・・・すいません・・・・」
未外（みんがい）も頭を下げる。
これは別に・・・可愛くはない。
「へぇ・・・雪姫・・・雪姫ねぇ・・・大層な名前だなぁ、オイ」
冷無（れいむ）が、いちゃもん付けるように言った。
「な、ちょっと冷無！失礼だろ？！雪姫さんに・・・・！」
そんな未外を無視し、冷無はさらに質問した。
「で、雪姫さんよぉ。もう一つの質問にも答えてくんねーか？」
「何で、ここに居たか・・・ってヤツ？気の済むまで説明してやるわ。」
ピリピリと、空気が重い。
　この２人、ホントにさっきまでモジモジしたり、顔赤くしたりしてた人達？！

未外が思うに遅し。
先ほど冷無に言われた言葉・・・雪姫の勘に触れた。
「じゃぁ、私と手合わせお願い出来る？・・・えと――――――冷無さん」
「あぁ？！」
目をギロッと雪姫に向けた。
「何で、てめぇさんと手合わせしなきゃなんねぇんだ？」
「あら？負けるのが怖いの？勝ったら、それもおしえるから・・・。」
くすくすと笑う。
だがその笑みは、さっきの様な温かい笑みではなく、冷たい、血に飢えた化物が作り出した笑みだった。

第九歩　本性（後書き）

怪しい雲行きに注意！・・・なんてね・・・・。
調子こいてます。
テンション高いんで、今。

第＊十歩＊　家主の心境～壊れゆく家～（前書き）

バトル開始。

第＊十歩＊　家主の心境～壊れゆく家～

　♪人ハイズレ死ヌンダト、教エラレタアノ夜　＊＊＊

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「手合わせ・・・何のこっちゃしらんが、受けてたとうじゃねーの。
ま、言えるほどの実力があんのかどうかだが・・・」
にやっ　と笑んだ冷無（れいむ）。
その態度に雪姫（ゆきひめ）は、本気でイラついた。
「はっ！・・・どっちが・・・！！！」
客室に、ドロドロとした空気が漂う。
(な、なんなんだよ～！？この雰囲気！何でいきなり挑発的になってんの？！
　冷無このアホ！)
部屋の隅で、今まであまり台詞が無かった未外（みんがい）が、心の中で喚いた。
つーか、お前はしゃべれ。
「じゃぁ、お願い出来るかしら？」
フフン♪　鼻をならす雪姫。
「おぅ・・・望むトコじゃぁねぇか・・・・・・！！」
(──────殺すぞオーラ満載だ、この２人・・・・)
未外は目に軽い痙攣を覚えた。
(はぁー・・・もう、どうにでもなれ・・・
　俺は知らん！夢だ夢。そうさ・・・！これは・・・・・)
思いかけた瞬間、
　ドゴォッッッッ！！
壁が壊れる音がした。
それも、自分のすぐ近く────────って、横じゃねぇかぁぁぁぁぁぁ！！？

「でぇぇぇぇぇ？？！な、何何何何何何何いいいいいいいい？？？？！！」
頬から血が伝う。
真っ赤で、生温くて、そして・・・・今にも動き出しそうなくらい、嬉しそうに、畳に吸い込まれてった。
「何だよ・・・これ・・・？ホントに・・・・・・俺ん家？！」
未外の目の前で、妖怪と人間がマジバトルを繰り広げる。
さっきまで、クリっとしてた可愛い青い眼が、鋭い目付きに変わり、さっきまで、飄々としていた表情が、もの凄い形相になった。
客室が、どんどん破壊されてゆく。

第＊十歩＊　家主の心境～壊れゆく家～（後書き）

おかげ様で、連載１０話目に到達致しました！
読んで下さった方々に感謝を込めて・・・
これからも、
ヤツらをよろしく頼みます。

第十一歩　血。（前書き）

冷無ｖｓ雪姫の戦いです。
題名通り、血が出ます。

第十一歩　血。

♪　わたしは夏がきらい。

♪　おれは―――――――セロリがすき。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋

土埃が舞った。
何故、冷無（れいむ）が雪姫（ゆきひめ）さんに対して挑発的になったか。
なんて・・・知らないよ。
ただ、今現在、唯一分かる事・・・・それは、

　自分の家が、思いっきり壊されてる

って事。。。

　どうしようもない状態に侵されている

って事。。。

物が叩き壊される音に、障子が破れる音がする。
何時の間にか、彼女―――雪姫と名乗った女性の髪は、短髪から、
冷無と出会った時と同じ、長髪に戻っていた。
激しい戦闘の最中、其の長い水色を揺らす。
「あれ？なかなかヤルねぇ・・・ふふ★」
ニコっと笑いながら、冷無の蹴りをかわす雪姫。
「でもその余裕・・・何時まで持つだろ？？」
狂気にも似た表情で、笑みを浮かべた。

その直後、　ゴシャァァァァァ！！！　床の材木が潰れた。
何所に隠していたのか、大きなボールの様な何か・・・・を、叩きつける。
いや、正確に言うならば、円柱の棒の先に、鉄で出来ている巨大なビー玉がくっついている感じだ。
「――――――っ！！！武器使いやがんのか！？」
「あはははははははは！！」
冷無が気付いた時すでに遅し。
狂った笑いを振りまきながら雪姫は、冷無の頭蓋骨目指して己の武器を力一杯振り下ろした。
　グシャァァァァァ！！
「・・・？！」
未外（みんがい）は、冷無が潰れたような錯覚に陥った。
自然と、涙が流れた。
（う、嘘だ・・・！そんな、冷無が・・・し、死ぬ訳――――！！！）
考えるより先に、口に出た。
「冷無ぅ！！！！」
流れた涙は、怪我した頬を伝い、落ちていた木材の上に落ち、小さなシミを作った。

第十二歩　笑み（前書き）

なんかの終止符をうつ時。

第十二歩　笑み

タラン　タラッ　タタン♪

リズムに合わせて

操られるヤ★

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋

パラパラと木片が舞い落ちる。
冷無（れいむ）の姿は、まだ土埃に消えたままだ。
「冷無・・・？何で・・・何でぇ・・・」
大粒の涙が未外（みんがい）から流れた。
「・・・の・・・冷無の・・・・バカヤ―――」
言いかけた時、

ガラガラ！！

崩れ落ちていた木材達が一気に盛り上がった。
「誰がバカだよゴラァ？！・・・いつつ・・・」
床下から、冷無が這い出てきた。
「冷無！！？」
突然に事態に未外は戸惑った。
が、それは、未外のみではなく、雪姫（ゆきひめ）も同様に、だ。
（やっぱり・・・思った通り！）
「悪いけど、ここでストップさせてもらうわね？」
『？！』
未外と冷無は驚愕した。
勝手に仕掛けといて、勝手に終わらせる・・・って、自分勝手にも

ほどがある。
「いい加減にしろ。おい女！
一体どうゆう了見だ？俺で遊んでたってか？？」
冷無が思いっきり睨み付けた。
が、怯えもせずに、彼女は言った。
「遊んでた訳じゃないけど・・・ま、勝っても負けても教えるつもりだったし。
君からの質問。。。」
クスクス笑う彼女の空気は、まるで木漏れ日のようだ。
さっきの目からは、想像できないくらい温かい。
「じゃ、じゃぁ、何で手合わせなんて・・・・？」
未外が問いた。
「その事も教える。２人には。・・・えっとぉ・・・？」
「？・・・あっ、俺は未外で、そんで、こいつは太刀気　冷無って言います。」
「『太刀気』・・・くん・・・・。」
改めて紹介してやる。
「未外くんと、太刀気くんには――――ね？」
冷無は相変わらず　ぶすぅ　っとしてる。
だが、俺は思わず
「あ・・・はっ、はいぃ！」
声が裏返った。
それより、どきっとした。
そんな空気をブチ破ってくれたのが――冷無さんだ。
「じゃぁ教えろや。キッチリとなぁ。」
またもや　ギロ　っと睨み付ける。
「はいはい・・・・」
苦笑しながら返した。
雪姫は、話出した。

第十二歩　笑み（後書き）

終わった～・・・やっとだよ。もう・・・。
はぁ～・・・・・・疲れた。

第十三歩　コンビネーション（前書き）

何かもう・・・ぐだぐだで・・・・。

第十三歩　コンビネーション

死んで下さい。
お姫様――――

赤ニ染マッタ・アノ日ノ出来事。
赤イ赤イ・止マラナイ☆
＋＋＋

淡々と答えた。
「ん～、簡単に言っちゃえばあいさつ代わりってトコなんだけど、
そうだな・・・うん！君に何かを感じたの。
特別な・・・何か・・・・・・」
一つ一つの言葉を、ぎこちなく並べ替えて発してく。
「だからよぉ、具体的になれっつてんだよ、俺は。」

ハァ・・・

雪姫は、溜息をつく。
「じゃぁ言うけど、ついて来れんの？」
「？」
「私が話す内容に。」
【カッチ～ン】
「なぁ？！望む所だこんちきしょう！！腹立つなぁホント！」

冷無が騒ぐなんて・・・めずらしいなぁ・・・。

未外が苦笑した。
すると、

『何笑ってんだごらぁ！！！！』

重なった怒声が客室だった場所に響いた。

「ご、ごめんなさい・・・」

とりあえず――――――あやまっときました。

第十三歩　コンビネーション（後書き）

「何コレ？」って感じッスよね？
バカバカしぃっつーかさ。

第１４歩　向き・不向き（前書き）

ひたすら騒ぎまくります。

第１４歩　向き・不向き

「助けて」　って。
言ったはず。

あなたはどうして　きてくれなっかたの？
なんであのとき　いなくなったの？

幼い頃に・できた傷跡

＋＋＋

俺は夕飯作ってるから。」

ついには未外も、部屋を出ようとする。
が、彼等の目には映っていない。
とゆーかもう、子供の口喧嘩になっている。

このバーカ！お前のか～ちゃん、で～べ～そ～！！
なにぃぃ！！バカって言った方がバカなんだ！このバ～カ！

こんなレベルだもん。
未外が呆れるのも頷けるわ！
まぁ、そんなこんなで・・・・・

＊2時間経過＊

まったく・・・2時間も何しとったん？おんどら。
まさか、ずっと口喧嘩しとったんか？

そのとーりです。
もう7時を過ぎちゃいました★
夕飯の時間です☆
てな訳で・・・・・

＊いただきま～す！＊

「・・・何だこの展開はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？？！！！！！」

ドガシャァッ！！！！！

食卓が揺れた。

激しい音をたてながら。
「おかしいでしょ?!
何で雪姫さんがここでご飯食べてんの?
何で冷無はもうおかわりしてんの?
何で皆冷静で居られんの?
何で平然としてられんの?
訳分かんないよ!」
動揺しまくりの未外さん。
「長台詞ご苦労。つーかうるせぇ。」
冷無さんは、名前のとうり冷たい御方ですね。
「未外くん、そんな驚かなくてもいいじゃない。ご飯おいしいよ?」
ザ・マイペースガール雪姫さん。
「いや、俺が作ったヤツだから!
どうしてそんなとけ込んでんの?家の食卓に!!」
「いいじゃないっスか、未外さん。
空裏心道寺の紅一点って所ですよ。」
なだめる門下生達。
「意味分からん!その理由ぅ!!」
喉を枯らしてツッコむ未外でした。
良かったよ、しゃべってくれて♪

第１４歩　向き・不向き（後書き）

テンション高ぇ。こいつ等・・・。
多少方言がまじってましたね。
あ、ちなみに、

冷無・ボケ＆ツッコミ
未外・ツッコミ専門
雪姫・ボケ＆ツッコミ

みたいな感じで。
役割決めないとね。

第十五歩　ツッコミレベル・1（前書き）

うるさいです。

第十五歩　ツッコミレベル・1

私は夏がきらい
俺はセロリが好き
俺は・・・この場所が、好き。

いつかおわる　このじかん
たいせつに　もっていたい
＋＋＋

「だから！
おかしいって！
何・おいしかった～・的なリアクションしてんの？！
皆！！」
未外が喉を震わせる。
「何だ未外、てんどんか？
今の時代な、てんどんだけじゃ笑いは取れねーぞ？」
「誰がお笑い目指しとるかっ！！」
「あっ！てめぇ、笑いモンの人に失礼だろーが！」
「知るかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！
お前のその、笑いモンと言う表現の方がよっぽど失礼だろーがぁぁぁぁ！！！！」
夜の空裏心道寺は賑やかです。
あ、いや、そーゆーんじゃなくて。
「つか、雪姫さんにしても何くつろいで・・・って何してんだお前ぇぇぇぇ！！！！」
「ん？なにって？」
雪姫は、悪気無さそーな顔つきで、パフェを頬張っていた。
「なに？じゃなくて！それですよソレ！チョコパフェ！！」
「あぁこれ？手作り。」
「手作り。じゃねーよ！
この家の何所にパフェを作るに最適な材料あった？！」
未外は荒れまくりだ。
まぁ、ツッコミ隊長だから仕方ない。
「あ、そう言えば雪姫さん。
雪姫さんって、どこの生まれスか？」
ヤクザの1人が切り出した。
そのヤクザさんの名は・・・！
っていらないか。面倒だし。
「私？私は・・・ねぇ・・・」

何と無く苦しそうに言葉を詰まらせる雪姫に未外は気付いた。
（そっか・・・雪姫さん、あんまり口外したくないのかも・・・・）
と。
「ねぇ・・みん・・・」
皆、雪姫さんはしゃべりたくないんだ

言いかけると・・・。
「私は、魔界出身」
さらり　　秘密を自分から暴いちゃいました♪
「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？！！」
今まで、散々口を閉ざしてたのに！
俺らにな～んも教えてくんなかったのに！
未外は絶叫し、目を向いた。
「え？雪姫さん？！お、俺てっきりそれタブーかと・・・」
「いや、そんな事ないけど・・・なんで？」
キョトンとした顔で問いてくる。
「い、いえ・・・あのぉ・・・それなら、教えてくれたっていいじゃないですか。」
「あぁ・・・いいけど。」
すんなりＯＫをくれた雪姫。
「え？何を何を？？」
皆が寄ってきた。
そんな中、
え・・・？じゃぁ、何でこれまで明かさなかったの？
読者飽きちゃうじゃないか・・・。
未外は汗をかく。
なんか・・・すいません読者の皆さん。
みたいな事を思いながら。

第十五歩　ツッコミレベル・1（後書き）

未外うるせぇー。。。
でもそんな貴様が好きさ。

第十六歩　酒で殺して（前書き）

飲酒は２０歳になってから！

第十六歩　酒で殺して

あの日の影を
追っかけて
もう　何年経つだろう？

数えた記憶すら　無いまま

＋＋＋

そして魔界は、この人間界と言う空間に重なる形で存在する空間
魔界では人間じゃない、もう一つの生物・・・・妖怪が、ウジャ
ウジャ暮らしてる
私は、その・・・魔界の王血として生まれた
正確には――――作り出された・・・・」

この場に居た全員が凍りついた。
どうゆうことだ・・・と。

「魔血殺妖宝（まけつやようこ）　雪姫（ゆきひめ）として生をうけた私は、
それから２０年も生きなかった・・・
１８になった夜――――殺されたの・・・誰かに」

空気が張り詰める。

「でも、そこは・・・ほら、不老不死だし、生き返ったんだけど・・
・でも・・・
やっぱり怖くて・・・強くなりたいって・・・思って・・・
家飛び出してさ・・・・人間界に逃げてきたの・・・」

これが、人間界に来た理由・・・？
誰もが思うだろう。
しかし、終わりでは、ない。

「来たのは良かったんだけど・・・時期が悪くて・・・ハハ・・・
戦争に捲き込まれたり・・・あと・・・そう、水難事故とか・・・
変な人に拉致られて、嫌な殺され方したり・・・
で、なんだかんだで、５回くらいしんじゃって・・・
最近生き返って、気付いたら妖気の濃い場所に・・・・ここに、
いたの。」

沈黙がしばらく続いた。
そんな空気をぶち破ったのはもちろん、冷無だ。

「そうか・・・」

また沈黙。
それしか言いようないしな・・・。

「あ・・・なんか・・・何度もすみません
言いたく無い事を・・・」
未外が口を開いた。
「ん・・・いいのよ
望んだ結果だし・・・」
雪姫は、笑顔を絶やさない。
「・・・わ、悪かったな・・・なんか・・・その・・・
ま、いいって言うんなら、しつこく言わねぇけどよ・・・・」
冷無も、何処と無く流されている。
「そんな・・・固まんないでよ～　太刀気くんらしくない」
「お前は俺の何を知ってる？」
「ま、まぁいいじゃないスか！
今日はパァ～っといきましょう！
雪姫さん！　お酒いけますか？！」
門下生の一人、森脇（もりわき）　岳矢（たけや）が切り出した。
ちなみに１９才。
「岳矢？！！！
君、未成年だろ！！」
師（仮にも）の未外はご立腹だ。
「おっ？　酒？？
いくらでも入るぜ～？」

「いやダメだろ冷無！
君までそんな事言っちゃぁぁぁ！！！」
「お酒平気だけど？
ジャンジャンいきますか！」

『ジャンジャンいきましょおおおおおお！！！！！！！』

活声が沸いた。

嗚呼、今夜は何処まで行くんだろ・・・？

未外は、何とも言えぬ心持ちで、彼等に付き合う事にした。

第十六歩　酒で殺して（後書き）

飲酒は２０歳になってから！

第十七歩　髪型（前書き）

3人揃って
色空
です。。。

第十七歩　髪型

空を見上げた。
ヒトスジの光が流れた。

どうしようもなくたちつくした　それしかできなかった
＋＋＋

「・・・・・・・・ん・・・・？」

未外、起床。

「ヤッベ・・・あのまま・・・寝ちゃっ・・・・！？」

未外、驚愕。
そりゃそうさ。
「・・・なんで？」
寝る前まで、あんなに散らかっていたはずの居間に、塵一つ残っていないのだから。
「おはよー未外くん」
後方から女性の声がする。
振り返ると、其処には・・・・・。
「・・・・どうしたの？
未外くん？」
ポニーテールでエプロン姿の雪姫（ゆきひめ）が、洗濯物を畳んでいる。
「い・・・いえ・・・
あの・・・雪姫さんこそ・・・
どうして・・・？」
雪姫は一瞬、キョトン顔。
でもすぐに質問の意味を理解し、言った。
「未外くんが寝てるからって、太刀気くんと2人で
手分けして家事してんの♪
案外いい所あるのねw
太刀気くんて」
クスクス笑いながら、洗濯物を畳む雪姫。
そこへ、
「なぁ雪姫ぇ～、お、終わった・・・ぞ・・・」

弱弱しい呼びかけが。
冷無(れいむ)だ。
「さ、さすがに・・・５０人分部屋掃除はキツイ・・・
あぁ、未外　起きたのか・・・」
グロッキー状態の彼は、床に座り込んだ。
「・・・・お疲れ様」
未外は今一状況が理解出来ていないようだ。
何で、あの冷無が家事手伝ってんの？
とか。　色々。
まぁ・・・深くは考えないでおいた。
そんで、３人がなんらかの会話をしている最中。

ピ～ロリ～タン♪

何とも言えない不可思議な呼び鈴・・・もとい、チャイムが響いた。
実を言えばこのチャイム、冷無がぶっ壊したのが原因で変な音が出るようになってしまったとか。。。
「あ、誰か来た」
「私出るよ」
「いい、いい
俺が出るからさ　２人は居ていいよ」
せめてものお返しを。
未外はそう思い、玄関へ向かった。

「・・・・なんや、居らんのかいな？
誰かぁ～　出て来てや～」

玄関先で男の声が聞こえてくる。
「あ～すいません！　遅れちゃって！
あの、ご用件は・・・？」

ゼェゼェ息を乱す未外。
「用件？
せやな、姫ちゃん居る？」
淡々と、軽い口調で男が言った。
「・・・ひ、姫ちゃん？」
姫ちゃんて・・・・誰？
未外は正直にこう想った。

第十七歩　髪型（後書き）

更新遅れスマソ。
期末近いので、次の更新が何時になるか・・・。
中学生はなんやかんやで忙しくなる。

第十八歩　白（前書き）

新キャラ？
前から出したくて堪らなかった奴です。

第十八歩　白

心の底から好きなんだ

モウ、キキアキタ。

君のこと愛してるんだ

モウ、ウンザリヨ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「・・・姫ちゃんと言いますと・・・？」

未外（みんがい）が、逆に質問した。

玄関に立つ男へと。

「姫ちゃん言うたら姫ちゃんやがな」

「いや、姫ちゃん誰だよ！」

居間まで、そんな会話が聞こえた。

「誰だろ？　知り合いかな？」

「さぁな・・・

ツッコムのが趣味みたいなモンだからな

アイツは」

「未外くーん！

早く戻って来てぇぇ！　ボケで飽和しちゃう！！」

雪姫（ゆきひめ）も冷無（れいむ）もノリノリだ。

まだ午前中だというのに。

「ちょっと、遅すぎるわよ　戻ってこない」

まだ、玄関先からワァワァ騒がしい音が聞こえている。

「私見てくる」

そう言って雪姫は廊下をトタトタ歩いていった。

―３０秒後―

「ギィィヤァァアアァァァァ！！！！」

バタバタと足音が、奇声を発しながら
居間の方に近付いて来る。
――――雪姫の声だ。
「どしたぁ？
ゴキブリでも出たか？」
ダイニングテーブルに肘をつき、走って来る雪姫にチャカを入れる
冷無。
「っとぉぉ！　雪姫さん？！
何で逃げるんスか！！」
未外は負けじと、全速力で雪姫の後を追い駆ける。
「う、うぅぅぅうぅぅう後ろぉぉぉぉ！！！」
「えっ！？　後ろ？？」
未外は首を回した。
あ、グルゥンってゆうあの、気持ち悪いヤツじゃなくて。
すると目線の先には、
「ひぃぃぃぃぃめぇちゅぁあ～ん！！！
逃げんでもええやんかぁぁぁ！！」
一本結いの男・・・・先ほど空裏家のチャイムを押した張本人。
男の名は――――

「グッディーノがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

『・・・・・
グ・・・グッディーノ・・・・・・・？？』

第十八歩　白（後書き）

出たね。
コイツ、実を言うと二番目に気に入ってるんですよw
え？　一番は誰か？
あ、そんな事聞いてねぇ？
そうですか。
まぁ、一つ宜しくお願いします。

第十九歩　黒（前書き）

意味無いです。

第十九歩　黒

どうして生きてんの？

知ったこっちゃないか。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

グッディーノと呼ばれた彼が、雪姫（ゆきひめ）さん
を追いかけて、その後を俺が追っかけて、冷無（れいむ）が
それを見て鼻で笑って・・・。
あまりに五月蠅いから、門下生皆起きてきっちゃって。
とりあえず、俺ら４人は客室に入った。
そんな様な所から、話、進めます。

「で、なんなんですか？」

未外（みんがい）が言った。
「何ィ言われても・・・分からへんがな」
未外の正面に座るグッディーノ。
その隣には、
「・・・ちょっと・・・・
何で隣座んの？　近付かないで」
冷たく言い放つ雪姫が。
「つれないなぁ、姫・ちゃん・は・（ハート）」
「気持ち悪い！！」
「ぐばはぁ！！」
グッディーノは、座ってから数分で殴られた。
「あのよぉ
雪姫の問題もまだ説明されてなくて、

引っぱりすぎでイラっときてんだよね　こっちも
新キャラだかなんだか知らねぇけどよ・・・」
冷無は机に肘をついた。
「いや、そゆう事言うんじゃねーよ！」
賺さず未外のツッコミ。
「雪姫さんの事は一旦置いといて・・・」
「あ、置いとかれた」
「そこは拾はないで下さいよ」
とゆういらない会話の後、
「なんやねん
ワシぁただ、姫ちゃんに会いに来ただけや」
グッディーノが口を開いた。
「だから、姫ちゃんがまず誰なんですか？」
「姫・・・？
・・・・・・・雪姫のあだ名？」
「せやねん！
なんでパパっと分からんねや！」
「なんだぁ？！
うっせーな！！」
未外が火を噴いた。
「・・・・・ストーカーでしょ
唯の」
雪姫は呆れ気味に溜息をついた。
「ストーカーァァァァァ？？」
「そげん事言わんといてぇなぁ　姫ちゃん」

「・・默れ・・・・・」

雪姫は、一言、呟いた。

第十九歩　黒（後書き）

メッチャ遅れた（更新）。
すいませんね、なんか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6888a/

灰色と水色の空

2010年10月11日21時16分発行